

日本は、秋が深まりゆく頃なのでしょう。いかがお過ごしでしょうか。ここルワンダは、現在雨季ではありますが、雨の日は少なく、例年並みの降水量を下回るのではないかと、そして農業への影響を懸念しています。

リリマでは、10月より新しい受益者一家族・ふたりを受け入れました。今回の短信は、この2人についてご紹介いたします。

新しい受益者家族の姉弟

ふたりは、同じ両親から生まれた姉弟で、姉・ジョセリンが17歳、弟・インマニエルが13歳です。ふたりの父は7~8年余り前に亡くなり、母は3年前、突然しかも家族に黙って家を出て再婚をし、隣国のウガンダに住んでいるそうです。この姉弟は、母方の祖父母と一緒に暮らしていますが、食事の準備や家事一斉、畑の耕作、祖父母の世話、家計に関わるほとんどの責任を姉のジョセリンが負っています。一家の収入は、ジョセリンが近所の農作業の手伝いや子守りなどをして、そのお礼にわずかの野菜や現金を得ているそうです。

このような事情からジョセリンは、小学校4年生、インマニエルは小学校3年生です。ふたりがどのように学費を捻出しているかと言うと、インマニエルが収穫を終えた畑で、取り残したものを集め、それを市場へ持って行って換金し、ふたりの学用品や制服代などにしたと言います。

食べる物が少ない日は少なくなく、ふたりとも栄養失調で大きなお腹をしています。ジョセリンは、身長158センチ、体重34キロで、幼少時、耳を患ったにも関わらず治療をしなかったため難聴があります。そして、孤立、不眠や悪夢などのトラウマの症状があります。

この姉弟と祖父母を含む家族の長は、ジョセリンです。このように18歳以下の少年少女が、家長として一家の責任を担い、弟や妹たちの世話をしている家庭を、Child Headed Household と言います。1994年の大虐殺後には、両親を亡くしてこのような家庭が多数生まれましたが、現在は別の理由によるものです。ジョセリン一家の著しい困窮は、この地域の中で支援が必要なリストに挙がっているようですが、公的な支援はありません。

9月の下旬に家庭訪問した際、カウンセラーのロレンスがふたりに尋ねました。「もし私があなたたちを我が家へ招待しようとしたなら、何を準備したらいいかしら？」すると、ふたりは「ご飯、ファンタ（清涼飲料水）、肉…」など、日頃口にしていない物を言うのでした。

9月28日、ふたりをセンターへ招き、身体を洗い、供与した衣類に着替えさせ、要望のあった食品を準備して、ジョセリン、インマヌエル、そして私たちスタッフが一緒に昼食を取りました。

そして10月2日より、ふたりに給食を始めました。月曜日から金曜日まで、ふたりをセンターへ招き昼食を提供しています。これを始めたのは、主に2つの理由からです。一つには、ふたりが著しい栄養失調であること。二つ目は、通常のやり方で食費を渡したのでは、他に流用され目的を達成することができない。つまり極度の貧困のため必要が多いこと、祖父母とジョセリンの力関係から彼女の思うように食費を使うことは出来ないだろう、と考えたからでした。

給食を始めて2日目、インマヌエルが食事をしながら私たちに、「明日も来るの？」と尋ねました。栄養価を考慮した美味しい食事を口にすることは、久しくなかったのでしょうか。愛おしい子どもたちです。ジョセリンは、2週間で2.5キロの体重増加がありました。

11月より、祖父母をも含めたこの家族に主食を含む食料の支援を始めました。それは、食費として現金を渡すのではなく、食品を購入した上で供与する現物支給です。しかし、そこまでしてもなお、食品を換金する可能性があります。その為、近くに居住する地域のリーダーの協力を得て、食料が食料として用いられているか否かを確認してもらうことにしました。

まずはジョセリンとインマヌエルとの信頼関係を築くことを念頭に置きながら、他の支援を進めてゆきます。このためにお祈りくださるよう、お願い致します。

2017年11月6日

竹内 緑



初めてセンターへやって来た日のジョセリン（写真左）、お腹の大きいのが分かります。インマヌエル（右）。



ふたりをセンターへ招き、食事を共にした9月28日。
身体を洗い、着替えをしたジョセリンとインマヌエル。